

千島最北端の冬はことのほか寒く「敵前の寒さかな」で仕方なしでした。

昭和十九年五月一日、水兵長を命ぜられ、十月まで探照灯員として勤務する。千島は魚が豊富なので不足したのは生野菜でした。ほとんど乾燥野菜なのでビタミン剤が配布になりました。千島には「這い松」、奥に入れば木もありました。燃料もなくなるので炭焼き作業などもやりました。

十九年の冬、大艦砲射撃をくりました。夜間でもあり、我が高射砲も応戦しましたが、とてもかなわず射撃を止め、敵の上陸に備えて武装して防空壕で待機しました。夜が明けてから見ると艦砲射撃の弾のあとには数えることもできないくらい撃たれていました。艦砲射撃は爆弾より恐ろしいと思いました。

二十年の四月一日、館山砲術学校普通科測的術練習生卒業と見なされ当校特技章を付与されました。五月初めより本土決戦のため徹夜で作業続行して高射砲を解体し「浮島丸」に積み込み、先発隊として「浮島丸」に便乗、五月十日摺鉢港を出港して五月十五日大

湊港に到着したわけです。すぐ荷揚げ作業をやり大湊、大畑方面の陣地構築など本土決戦準備に従軍し、八月十五日終戦となる。

その後、海軍保安隊として十月三十一日大湊海軍保安隊を除隊する。

## 北限の幌筵島守備

山形県 後藤 半三郎

私は中流農家の三男として生まれ、入営前高等科卒業と同時に軍属要員として岐阜県各務原陸軍航空廠に入り、六カ月の教育終了と同時に、北支南苑第十五野戦航空廠に派遣される。軍隊現役兵入隊まで三年二月軍属として軍務に従事しました。

昭和十七年七月、現役兵として宮城県玉浦の東部第一一一部隊に入営しました。そこで初年兵教育を五カ月間受けました。この部隊は飛行部隊の整備大隊であって、整備関係の学術科が午前中の訓練であり、午後

が一般の歩兵の訓練に充当されていました。

起居は内務班で、この隊とも同様に厳しいピンタの繰り返しと、所持品の員数合わせに頭を痛める毎日であり、現在の若い世代の方々の想像もつかない苦難を重ねる毎日でした。五カ月の初年兵教育終了後、北海道千歳の第五飛行大隊にしばらく勤務した後、北ぱらしる島幌筵北の台陸軍飛行第四戦隊（隼戦闘機十七機）に勤務することになり征途に就いたわけです。

幌筵北の台飛行場の飛行第四戦隊は将校、下士官二十名くらいと将校当番兵など若干の兵が勤務していました。飛行場第五十五整備大隊は大隊長大尉を長として八十名で、この北辺の飛行場の守備に当たっていた。アツツ島の悲しい玉砕、キスカ島の幸運な無血撤退後、この島々を占領した米軍は、ここに基地を設定したのである。

幌筵島はカムチャッカから、次は占守島、次が幌筵島であり、占守島は小さく飛行場も守備兵もなく、幌筵島北の台飛行場が日本軍の最北端の守備航空基地であった。

こうした関係位置にあった飛行場を敵が見逃すわけがない。アツツ、キスカ両島基地から飛翔する敵コンソリテーター機十機程度の編隊爆撃機は毎日その姿を幌筵島上空に現し、我が軍の高射砲の射程距離を遙かな上空より地域を制圧する絨毯爆撃を主として日課のように反復する日々が続く。

これに対し、我々大隊は、大切な飛行機は分散配置と、徹底した偽装遮蔽を行い、最後まで飛行機の損耗を受けることなく守り通したのであった。

隊員はこの毎日の空襲に対しては、堅固な防空壕にたよることなく、個々の蛸壺壕に手軽に飛び込んで、爆撃の損害を受けることなく引き揚げ時まで耐え抜いた。

後期に至って敵の上陸、艦砲射撃に対する考慮から山麓の中腹に横穴坑道壕の掘鑿が始まった。土質が堅い岩盤であったので、長い一メートルもあるタガネを使い、打ち込んで穿ち、これにダイナマイトを押し込んで爆破し、破砕した岩石はトロッコで坑外に搬出する方法で、耐え忍ぶ作業が続いた。坑道の深さ十メー

トルに達した時点で本土決戦に備え島から撤退が行われたのである。

幸いに敵の上陸がなかったので、玉砕から免れたがこの最北端の小島で、兵力も火力もわずかな捨て石的存在のこの守備隊のことを思い出すと、今でもゾーツと恐怖を覚えるのである。敵機は高空爆撃だけでなく、時には日本軍の電波探知機の空隙を衝いて、超低空爆撃に緊急出撃した我が隼戦闘機が体当たりで、敵コンソリーテードット爆撃機を撃墜する偉功を成し遂げた将校もあつた。

島の守備隊の食糧は、敵潜水艦から島の四周を遠巻きに包囲監視を続けるため、島への海上輸送は全く遮断され、我々の主食は飯は飯盒の中蓋に三分の一ほどに減量されたが、海からは漁師から借りた漁網を使用し、付近は北海道からわざわざこの海峡に出漁するほどの恵まれた漁場で、鮭がふんだんに捕れた。また昆布も沢山取れる海の幸に恵まれた。また陸地でもこんな極地でも夏期は雑草が生い茂り、この雑草が土壤に混じて豊かな肥沃な土地となる好循環で雑草が生い茂

り、ひめ菜、あざみなどが採集できて主食の不足を補って我々の体力維持に役立った。

この島に鼠が非常に沢山生息し、体も大型で夜間我々の兵舎の中に出没し、我々の就寝中の毛布の上を駆け回った。眼を覚ましたとき、毛布を跳ね上げ鼠を捕る。皮を剥いでストーブで丸焼きにして塩をふりかけて食べる。小鳥の丸焼きを思い出し美味しくいただいた。海岸で塩炊きも我々の仕事であつた。

北千島の気候は人の住める気候ではなかつた。はじめた空気でガスや霧があたり一面を埋め包む。日本内地の高山の頂上近くの気象状態に似ている。九月中旬には雪が降って冬に入る。風は強く毎日風速十メートルの強風に曝され通しだ。気温は零下三〇度に降下し、大小便共にカチカチに凍る。滑走路の除雪作業で円匙えんぎを握っても指先が凍って指に力を入れることができず円匙がクルクル回る。

九月初めに島を襲った台風は、風速六〇メートルを超える大暴風雨だった。我々は這って風の中、杭を打ち込んで、ロープで飛行機を杭に結束して飛行機の飛

散をくい止めた。這つて這つて這い回つた一日だった。

兵舎はこうした悪条件の気象に応じて、深い穴の中に築かれていた。兵舎の棟が地表面すれすれの高さで、建物全体が穴の中にすっぽり埋もれて作られ、屋根に明かり窓が数カ所作られ採光の役をしている。兵舎の中央が通路、両側が板張り、アンペラ敷きの起居寢床である。対敵、対暴風に備えた兵舎の構造である。

昭和二十年六月ころ、島は敵の艦砲の集中砲撃を受けた。スワ、敵の上陸、と島は極度の緊張に包まれたが、敵艦船の姿は一向に視界に映つてこない、ただ目も鼻も開けていられないほどの集中射撃の着弾の爆音に包まれる。敵艦は背後の山越えの射撃か、視界外の遠距離艦砲射撃だったのか不明のままだった。

昭和二十年六月、我々北辺の北千島幌筵島を死守、玉砕を覚悟していた隊員に、本土防衛の新任務のため北海道に引揚げ命令が通達された。隊員が心血を注ぎ、衆知を集めて、生き続けることにより大切な飛行機を守り通したのであった。滑走路は連日の空襲により使用不能の状態にあったが、隊員の力を合わせた復旧と

板を並べ敷いて、最小限飛行可能な状態に補修し引揚げを完了し、帯広第四飛行団司令部第三十八戦隊として勤務することになった。

北海道に引き揚げた後二カ月、八月十五日、終戦を迎えた。八月二十八日、隊を解散し、懐かしい故郷天童に帰った。出征時の一死報國の決意、生還の希望を断たれた北辺の孤島で睨いた故郷天童、全く夢見のような生還であった。

復員帰郷後、私に与えられた運命は、両親は健在であつたが、跡取りの長男が海軍に召集され巡洋艦で戦死。嫂が未亡人となり、遺児と両親を助け田畑を守り続けて暮らしている。

次兄は他家に婿養子となつたが、これも沖縄戦線で戦死。四男の弟も海軍でボルネオ方面に出征、帰還後戦病死、男四人兄弟で私一人が生還という不運に、茫然たらざるを得ませんでした。こうした不運の家庭状態を挽回するには、嫂と結婚し、甥を育て、一町五反歩の耕作を守り、父母に安心を与えることが我が家の戦争被害をくい止める唯一の脱出方法と決心しました。

耕地の半分は稲作、半分は果樹栽培に心血を注ぎ、今日までの長い戦後を守り続けてまいりました。

私の手元に今日まで残された軍属当時、昭和十五年第一次論功行賞の国債がそのまま残されています。

## 生き残った

### 沖繩戦の初年兵

沖繩県 永山清栄

#### ◎ 津堅島の守備へ

昭和十九年十月十五日、十十（十月十日）の沖繩大空襲（襲）空襲後間もなく、与那原の球第四一五二部隊重砲隊へ入隊。一月三日、第一期の検閲が終わり、午後三時ころポンポン船に乗って津堅島に配置になった。その人数は、三十九名（入隊した初年兵約八十名。中隊長が亭島大尉、教育下士官として福西伍長、他に助手が四名いた。そこで三月上旬ごろまで軍事教育を受け、三期の検閲も終えた。

その後擲弾筒、通信隊とそれぞれ別れ、私は十二センチ砲歩兵として配属された。ここでは実弾射撃の訓練があった。その後、下士官候補の希望者を募っていたので、私も応募した。下士官候補は重機関銃の訓練が必要と言われ、しばらくその訓練に励んでいた。

#### ◎ 米軍の来攻

昭和二十年三月二十三日、空襲があった。十月十日の空襲同様一日限りの空襲と思っていたら、連日の爆音に恐怖を感じていた。小隊長は壕の中で全員を集めて、「いよいよ、これから本格的な戦争が始まるんだ、だから気を緩めずに」と言っていた。

とうとう、二十四日から久高島沖に敵艦が現れ、知念方面へ艦砲が始まった。私たちも、いよいよ、沖繩で本当の戦争があるなあと、実感すると同時に身の毛のよだつを感じた。

間もなく、ケラマに上陸の報に接し、また四月一日に北谷方面から敵の上陸が聞かされた。

その頃から、昼は飛行機の機銃があり外に出ることが危険になった。だから、夜になるとタコ壺の壕掘り